

塾生募集!!

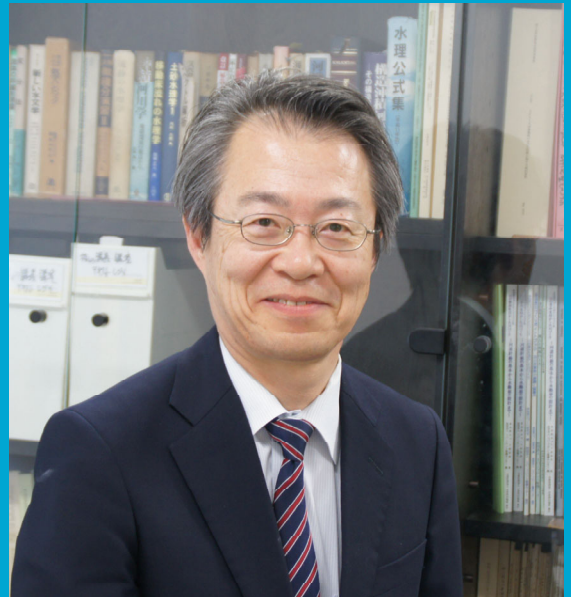
平成31年度

河川塾

一次を考える基盤としての河川工学を学ぶ

公益財団法人河川財団では、河川総合研究所所長 藤田光一による標記を開講します。専用テキスト「現代河川工学—基本と展開—：原論編」(100頁弱：目次構成を別記)を用い、その都度の題材も交えて、体系的講義(討議を含む)を計13回行い、受講生が次のような力を身につけることを目指します。

- ・河川工学の全体像がわかり、世の中のために河川工学を投入する道筋が見える。
- ・河川の仕事を組み立てる上での技術の抛りどころができる。
- ・河川と流域を良くするために様々な知恵や技術を糾合する中心軸を持てる。
- ・何をすべきかを自ら考える羅針盤として河川工学を使えるようになる。



公益財団法人河川財団 河川総合研究所 所長 藤田 光一

経歴

- 1981年 東京工業大学理工学部土木工学科卒
- 1983年 東京工業大学院修士課程修了
- 同年 建設省入省(土木研究所 河川部河川研究室 研究員)
- 1997年 建設省 土木研究所 河川部河川研究室 室長
- 2000年 建設省 中部地方建設局 三重工事事務所 所長
- 2003年～ 国土交通省 国土技術政策総合研究所 河川環境研究室室長・環境研究官・流域管理研究官・河川研究部部長・研究総務官・所長などを経て
- 現在 公益財団法人河川財団 河川総合研究所 所長

募集期限

5/17
(金)

必着

開催内容(予定)

講義 原則、隔週月曜日(年間活動計画参照)

17:00～19:30

※月曜日が祝日の場合は、翌日火曜日に開催(予定)

場所 公益財団法人 河川財団 会議室

期間 5月～11月までの6ヶ月間

応募資格 上記の趣旨に適い、意欲のある技術者等 ※客観的証明は不要です。

定員 15名 ※定員を超えた場合には参加いただけないケースが出てくることをご容赦願います。

参加費 7万円 ※専用テキスト、題材資料は含みます。旅費(含：現地指導)は別途必要となります。

その他 各自「水理公式集 2018年版」をご用意ください。

申込方法 裏面の必要事項とこれまでの技術者としての経験と参加理由を記入の上FAXいただくか、標題を「河川塾参加申込」としてE-mailで送付ください。



河川塾は、土木学会CPD認定プログラムです。(申請中)

年間活動計画

月	日	開催回	講義内容(予定)
5	27	第1回	趣旨・進め方の説明、第1章～第3章
6	10	第2回	第4章、第5章
	24	第3回	第6章(6.1～6.3)
7	8	第4回	第6章(6.4(1)前半)
	22	第5回	第6章(6.4(1)後半)
8	5	第6回	第6章(6.4(2))
	19	第7回	第6章(6.4(3))
9	9	第8回	第6章(6.4(4))
	24	第9回	第6章(6.5)
10	7	第10回	現地での指導
	21	第11回	第6章(6.6(1)～(2))
11	12	第12回	第6章(6.6(3))
	18	第13回	第7章、修了式

専用テキスト「現代河川工学—基本と展開—：原論編」の目次は裏面をご覧ください。

申込み先

FAX 03-5847-8310

E-mail honbu@kasen.or.jp

河川塾事務局 担当 山本・軍司 TEL 03-5847-8304



公益財団法人

河川財団

〒103-0001

東京都中央区日本橋小伝馬町 11-9

住友生命日本橋小伝馬町ビル 2階

TEL 03-5847-8304 FAX 03-5847-8310

河川財団 研究発表会

7月5日(金)一橋大学一橋講堂にて開催します。

詳細は、こちらをご覧ください▶



第1章 河川のとらえ方

第2章 河川の作用・機能・役割

- 2.1 「作用・機能・役割」という切り口の意味
- 2.2 自然物としての存在に発する河川の作用・機能・役割（自）
- 2.3 人間社会の要請に発する河川の作用・機能・役割（人）
- 2.4 河川の作用・機能・役割についての（自）と（人）との関係についての論点

第3章 作用・機能・役割（人）を確保するための河川施策の検討および実施の概要

- 3.1 作用・機能・役割（人）の確保に供せられる手段の代表例
- 3.2 河川施策検討・実施への手段群の組み込み

第4章 河川施策の検討および実施を支える学術とその位置づけ

- 4.1 科学研究、河川工学、河川技術の定義について
- 4.2 施策検討および実施における科学研究、河川工学、河川技術の相互の位置づけ

第5章 河川工学と河川施策の展開が創発的なものとなるための要諦

- 5.1 科学研究～河川工学研究～河川技術開発の関係のあるべき姿
- 5.2 河川工学の知見を河川技術化する際のポイント—嵌りやすい陥穽の回避—

第6章 機能確保を起点にした河川工学の体系

- 6.1 改めて体系を整理する意義
- 6.2 作用・機能・役割（人）の中で取り上げる4項目の内容
- 6.3 4項目を評価する道筋の概括
- 6.4 評価の道筋ごとの現象・プロセスの概括—体系の中核として
 - (1) 河道からの氾濫の頻度・可能性・起こり方を評価する道筋に関わる現象・プロセス
 - (2) 「河道からの氾濫の頻度・可能性」を所定のレベル以下に維持するために必要な労力を評価する道筋に関わる現象・プロセス
 - (3) 氾濫の起こり方が相対的にどの程度対処しやすいものになるかを評価する道筋に関わる現象・プロセス
 - (4) 生物・生態系、生物多様性を保全する基盤条件（物理環境条件）を備えているかどうかを判断するための道筋に関わる現象・プロセス
- 6.5 河川をシステムで捉える—体系を補完する重要事項その1
- 6.6 実現象からの継続的な学び—体系を補完する重要事項その2
 - (1) なぜこの学びが重要か？—河川管理の要諦からの説き起こし
 - (2) インパクトに対する河道応答に関する知見を積み増すこと
 - (3) 構造物の壊れ方を学ぶこと

第7章 河川工学体系の拡張

- 7.1 河川工学の不得手部分
- 7.2 他の学術との融合

フリ がな 氏名			技術者としての経験		
会社名					
部署			参加理由		
職位					
連絡先	TEL				
	E-mail				